

【79】河川工事で小判が出た！

埼玉県東端の、千葉県との境界をなす江戸川のほとりに「西宝珠花」（にしほうじゅばな）という小さな集落があります。現在の春日部市西宝珠花です。

宝珠花という美しい有難そうな名は室町時代までさかのぼることですが、江戸時代初期に利根川からの舟航を目的とした江戸川の開削により、大部分の集落のある「西宝珠花村」とより小さな「東宝珠村」に分断されてしまいました。江戸川が武蔵（埼玉県）と下総（千葉県）の境界になったので、西宝珠花村は武蔵に属します。

利根川から江戸川を介して江戸へ通じる舟運が盛んになるにつれ、西宝珠花村は河岸（かし、舟付場ひいては河港）として発展し、問屋（舟運業）や商店、旅宿が並び、大いに賑わいましたが、明治維新後運河や鉄道の発展により江戸川の舟運はさびれていき、昭和の頃は農村地域の静かな小集落に戻ったようです。

昭和22年9月のカスリーン台風による東京下町を含む南関東地域の大水害のあと、新たな治水計画の下で利根川、江戸川の改修が始まりました。舟運主体で川幅の小さかった江戸川上流部の河道は大巾に拡幅され、西宝珠花の集落（当時、庄和町の一部）は全面的に移動することになりました。その事業の最盛期の昭和30年頃にハプニングがありました。なんと移転した集落の跡地を掘削していた時

にカメに入った小判が出土したのです。新聞によりますと千枚の小判が出たとだいぶオーバー（？）に報道されています。

問題はその発見を工事責任者に報告せず小判を現場の作業員の間で分配し、骨董屋を通じて換金したことが発覚し、事件の様相を呈したことです。落語風にいえば、今までキーコ、キーコときしむボロ自転車通勤していた人が、ある日ピカピカのオートバイでダダダーッと出勤してきたというのですから人々の目を引かないわけはありませんし、警察が取り調べに入るといふ騒ぎに発展しました。

年月とともに“事件”は忘れられましたが、この話は、西宝珠花の江戸期の繁栄を思い起こさせます。現在ならば文化史上の大発見となったでしょうが、まだわが国が貧しい時代のこと、単なるお宝発見で終わってしまい、惜しいことをしました。